

令和8年5月28日
農推第1353-2号

病害虫発生・防除情報メールサービス

大阪府環境農林水産部農政室

目次	ページ
特に発生に注意【果樹類：果樹カメムシ類】	1
病害虫の発生予報(6月)	2
水稲、野菜【なす(施設栽培)、ねぎ、野菜類・花き類】	3~7
果樹【ぶどう、もも、みかん、いちじく】	7~10
花き【きく】	10~11
その他注意すべき病害虫【スクミリンゴガイ、クビアカツヤカミキリ】	11~12

特に発生に注意(6月)

果樹類：果樹カメムシ類



チャバネアオカメムシ

特徴

- ◆ チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシなどが加害する。
- ◆ 園地により飛来量が大きく異なる可能性があるため、園内を見まわり発生及び被害状況を確認する。

防除のポイント

- ◆ 園全体を目合い4mmのネットで覆い、侵入を防止する。
- ◆ 発生を認めたら、スタークル／アルバリン顆粒水溶剤(もも、かんきつ、ぶどう、かきなど)、アディオン乳剤(もも、かんきつ、かきなど)等を散布する。
- ◆ 薬剤散布は夕方か早朝に行うと効果的である。

令和8年5月22日発出の病害虫発生予察注意報第1号「果樹カメムシ類」についてもご参照ください。

https://www.pref.osaka.lg.jp/documents/129571/2605_r8cyuihou01_kajyukame.pdf

6月～8月は農薬危害防止運動月間です。
農薬は適正に使用し、事故・被害を防止しましょう！

次回の情報は6月下旬にお知らせします。

農薬を使用する際には、必ず農薬のラベルを確認してください。

病害虫の発生予報(6月)

作物名	病害虫名	予想発生量(6月)
水稻	ヒメトビウンカ(縮葉枯病)	やや多い
なす(施設栽培)	すすかび病	平年並
	灰色かび病	平年並
	うどんこ病	やや多い
	アザミウマ類	やや多い
ねぎ	さび病	やや少ない
	べと病	平年並
	ネギハモグリバエ	やや少ない
	ネギアザミウマ(えそ条斑病)	やや多い
野菜類・花き類	シロイチモジヨトウ	やや多い
	ハスモンヨトウ	やや多い
	コナガ	平年並
	オオタバコガ	やや多い
	アブラムシ類	平年並
	コナジラミ類	やや多い
	灰色かび病	平年並
ぶどう	べと病	平年並
	チャノキイロアザミウマ	平年並
	せん孔細菌病	やや多い～多い
もも	シンクイムシ類	やや少ない～平年並
	黒点病	平年並
みかん	ミカンハダニ	平年並
	カイガラムシ類	平年並
	アザミウマ類	やや少ない
いちじく	アザミウマ類	やや少ない
果樹類	果樹カメムシ類	多い
きく	黒斑病・褐斑病	平年並～やや多い
	アザミウマ類	やや少ない

※予想発生量は、平年値(概ね過去10年の平均)に比べて、「多い・やや多い・並・やや少ない・少ない」の5段階で示しています。

※ねぎは令和5年度より調査開始のため、過去2年のデータを平年値としています。

※予報の根拠は下記ホームページ内の「病害虫発生予察情報」の該当月をご確認ください。

<https://www.pref.osaka.lg.jp/o120090/nosei/byogaicyu/index.html>

水稻

ヒメトビウンカ(縞葉枯病)



ヒメトビウンカ成虫



縞葉枯病発生株

特徴

- ◆ ヒメトビウンカは縞葉枯病を媒介する。
- ◆ り病株では、新葉が垂れ下がって枯死する(ゆうれい症状)。

防除のポイント

- ◆ ヒメトビウンカが飛来しないように、周辺のイネ科雑草を除草する。
- ◆ 密植を避けて通風を良好にするとともに、窒素肥料の過用を避ける。
- ◆ ウンカ類に適用のある箱施用剤(フルスロツトル箱粒剤、ブイゲットフェルテラゼクサロンL粒剤)等により、ヒメトビウンカの防除を徹底する。

野菜

なす(施設栽培)

すすかび病



葉の病斑

特徴

- ◆ 高温多湿になる施設栽培で発生が多い。

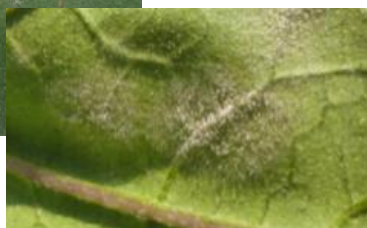
防除のポイント

- ◆ 適度に換気を行い、湿度を下げる。
- ◆ 発生が見込まれる時期に、プロポーズ顆粒水和剤、バルコート水和剤等を、発生を認めたら、ファンタジスタ顆粒水和剤、カナメフロアブル等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

うどんこ病



葉表の病斑



葉裏の病斑

特徴

- ◆ チッソ過多で気温が25～28℃、湿度が50～80%で日照不足が続くと発生する。

防除のポイント

- ◆ 発生が見込まれる時期に、バルコート水和剤、フルピカフロアブル等を、発生を認めたら、パンチョTFフロアブル、パルミノ等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

アザミウマ類



ミナミキイロアザミウマ成虫※

特徴

- ◆ 苗からの持ち込みにより本ぼでの発生が多くなる。
- ◆ ミナミキイロアザミウマ、ミカンキイロアザミウマが果実や葉を加害する。なお、ミカンキイロアザミウマの果実被害は、水なすで目立つ。

防除のポイント

- ◆ 葉の被害に注意し、少発生時の防除を徹底する。
- ◆ 開口部を0.8mm目合いの赤色ネットで被覆し、成虫の侵入を防止する。
- ◆ 雑草はアザミウマ類の生息場所となるため、ほ場内および周辺の除草を徹底する。
- ◆ 発生を認めたら、アファーム乳剤、モベントフロアブル等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

ねぎ

ベと病



ベと病の症状

特徴

- ◆ ベと病は好適条件(気温15℃前後で多雨)が揃うと急速にまん延する恐れがあることから、予防散布が重要である。

防除のポイント

- ◆ 発病株は、次年度の感染源となるため、ほ場外へ持ち出し、適切に処分する。
- ◆ 発生が見込まれる時期に、ダコニール1000、ジマンダイセン/ペンコゼブ水和剤等を、発生を認めたら、リドミルゴールドMZ、ベトファイター顆粒水和剤等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

ネギアザミウマ(えそ条斑病)



えそ条斑病の葉の病斑



ネギアザミウマ成虫

特徴

- ◆ ネギアザミウマは、高温で少雨の時に多発しやすい。
- ◆ ネギアザミウマは葉を吸汁し、加害部は白く色が抜ける。
- ◆ えそ条斑病は、ネギアザミウマが媒介するIYSV(アイリスイエロースポットウイルス)によるウイルス病である。はじめ、葉身に紡錘型のえそ条斑を呈し、進行すると病斑が癒合拡大し、葉が萎凋・枯死することがある。

防除のポイント

- ◆ ウイルス病に対する治療方法はないので、ウイルスを媒介するネギアザミウマの防除を徹底するとともに、発病株は取り除き、ほ場外へ持ち出し処分する。
- ◆ IYSVは一部の雑草にも感染するので、ほ場内や周囲の除草を徹底する。
- ◆ ネギアザミウマの発生を認めたら、グレーシア乳剤(アザミウマ類)、ディアナSC(アザミウマ類)等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

野菜類・花き類

シロイチモジヨトウ



幼虫

特徴

- ◆ ねぎでの発生が多いが、しゅんぎく、まめ類、なす科野菜、あぶらな科野菜、花き類等多くの作物を加害する。

防除のポイント

- ◆ 本種は、ねぎでは葉身内に食入し、薬剤が届きにくくなるので、発生初期（若齢幼虫期）に防除を行う。
- ◆ 発生を認めたら、ディアナSC（ねぎなど）、プレオフロアブル（ねぎ、こまつな、トマト、ミニトマト）等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

ハスモンヨトウ



幼虫

特徴

- ◆ なす科野菜、さといも等多くの作物を加害する。

防除のポイント

- ◆ 発生初期（若齢幼虫期）に防除を行う。また、卵塊や集団でいる幼虫の除去に努める。
- ◆ 発生を認めたら、トレボン乳剤（さといも、さといも（葉柄）など）、プレオフロアブル（さといも、なす、ミニトマトなど）等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

ヨトウムシ類については「ヨトウムシ類の見分け方」をご参照ください。

https://www.pref.osaka.lg.jp/documents/91954/yotoumushirui_osaka.pdf

コナガ



幼虫 ※

特徴

- ◆ 主にあぶらな科野菜を加害し、葉を薄皮だけ残して食害する。
- ◆ 一部地域でジアミド系殺虫剤に対する抵抗性が生じている。

防除のポイント

- ◆ 発生初期に防除を行う。
- ◆ 発生を認めたら、アフーム乳剤（こまつな、かぶなど）、ディアナSC（こまつな、かぶなど）等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。



成虫 ※

オオタバコガ



幼虫

特徴

- ◆ 果実や茎などに食入する。食害痕のまわりに虫のフンが確認されることが多い。

防除のポイント

- ◆ 幼虫の捕殺は、被害軽減効果大きい。また、摘除した茎葉や果実に、卵や若齢幼虫が付着していることがあるので、ほ場外へ持ち出し、処分する。
- ◆ 果実の食入孔の中にいるため薬剤がかかりにくく、さらに老齢幼虫には薬剤の効果が落ちるため、早めに対応を行う。
- ◆ 発生を認めたら、アニキ乳剤(なすなど)、プレバソンフロアブル5(なす、トマト、ミニトマトなど)等を散布する。



卵

アブラムシ類



ワタアブラムシ※

特徴

- ◆ 作物を吸汁し、生育を阻害する。また排泄物にカビが発生し、すす病の原因となる。さらに、各種のウイルスを媒介し、作物によっては致命的な被害をもたらす。

防除のポイント

- ◆ 発生を認めたら、スタークル/アルバリン顆粒水溶剤(なす、ピーマンなど)、コルト顆粒水和剤(トマト、ミニトマト、ピーマン、未成熟とうもろこしなど)等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

コナジラミ類



タバココナジラミ※



コナジラミ類成虫*

特徴

- ◆ 葉の汁を吸ってネバネバした液を排泄し、その上にすす病が発生するため、葉や果実が黒く汚れる。
- ◆ トマトやミニトマトでは、タバココナジラミの吸汁による果実の着色不良、TYLCV(トマト黄化葉巻ウイルス)やToCV(トマト退緑ウイルス)の伝搬等の被害を引き起こす。
- ◆ きゅうりでは、タバココナジラミがCCYV(ウリ類退緑黄化ウイルス)の伝搬等の被害を引き起こす。

防除のポイント

- ◆ 施設開口部に目合い0.4mmのネットを展張し、成虫の侵入を阻止する。
- ◆ 施設周辺及び内部の除草を徹底する。
- ◆ ウイルス病の感染株は、施設外へ持ち出し処分する。
- ◆ ウイルス病に対する治療方法はないので、ウイルスを媒介するタバココナジラミの防除を徹底する。
- ◆ ベストガード水溶剤(なす、トマト、ミニトマト、きゅうりなど)、アグリメック(なす、トマト、きゅうりなど)等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布する。



トマト黄化葉巻病発症株

果樹

ぶどう

※注意！

一部の農薬は、果粉溶脱を生じるおそれがあるので、幼果期から果実肥大期の散布を避けて袋かけ以降に使用し、無袋栽培(傘掛けを含む)には使用しない、等の注意事項が掲載されていますので、よく確認してください。

灰色かび病



花がらでの症状

特徴

- ◆ 多湿条件で発生が多くなる。
- ◆ 胞子が雨や風によって飛散し、傷口等から感染する。

防除のポイント

- ◆ 適切に換気を行い、湿度を下げるようにする。
- ◆ 第1回ジベレリン処理から結実始めの間にビニルでマルチングをする。
- ◆ 花がらが発生源となることが多いので、開花後に花がらを取り除く。
- ◆ 発生を認めたら、オンリーワンフロアブル、ゲッター水和剤などを散布する。

チャノキイロアザミウマ



被害果

特徴

- ◆ 巨峰、シャインマスカット等の大粒系品種で被害が大きくなりやすい。

防除のポイント

- ◆ モスピラン顆粒水溶剤、コルト顆粒水和剤などを散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布する。

もも

せん孔細菌病



春型枝病斑



葉の病斑

特徴

- ◆ 春になると越冬した病原菌が増殖し、春型枝病斑(スプリングキャンカー)を生じる。
- ◆ 病原細菌は、雨水に混じって分散し、気孔や傷口から感染する。

防除のポイント

- ◆ 発生が見込まれる時期に、チオノックフロアブル、デランフロアブル等を散布する。
- ◆ 春型枝病斑や夏枝型病斑を見つけたら、切り取ってほ場外に持ち出し処分する。
- ◆ 風当たりの強いほ場では防風ネットを設置する。

シンクイムシ類



被害果

特徴

- ◆ ももの果実に入食するシンクイムシ類は、ナシヒメシンクイ、モモシンクイガ、モモノゴマダラノメイガがある。

防除のポイント

- ◆ 被害枝は除去し、ほ場外に持ち出し処分する。
- ◆ 産卵期から幼虫加害期(5月上旬～7月下旬)にモスピラン顆粒水溶剤、アディオン乳剤などを散布する。

みかん

黒点病



被害果

特徴

- ◆ 梅雨時期など雨が連続すると発生が増加する。

防除のポイント

- ◆ 発生が見込まれる時期にジマンダイセン/ペンコゼブ水和剤、発生を認めたらストロビードライフフロアブル(かんきつ)等を散布する。降雨が多い場合には、散布回数を増やす。
- ◆ ジマンダイセン/ペンコゼブ水和剤を使用する場合は、皮膚のかぶれに注意する。

※注意！

ジマンダイセン/ペンコゼブ水和剤は、かんきつ(みかんを除く)における使用時期が「収穫90日前まで」なので注意する。

ミカンハダニ



被害葉

特徴

- ◆ 梅雨明け後に発生が多くなる。

防除のポイント

- ◆ 6月中～下旬に、ハーベストオイル、スプレーオイルなどのマシン油剤を散布する。
- ◆ 発生を認めたら、スターマイトプラスフロアブル、マイトコーネフロアブルなどを散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布する。
- ◆ 薬剤を散布する場合は、葉裏にも薬液がかかるように散布する。

カイガラムシ類



ナシマルカイガラムシの被害

特徴

- ◆ ナシマルカイガラムシ(サンホーゼカイガラムシ)等が加害する。

防除のポイント

- ◆ 幼虫発生期にスタークル顆粒水溶剤(かんきつ)、トランスフォームフロアブル(かんきつ)等を散布する。

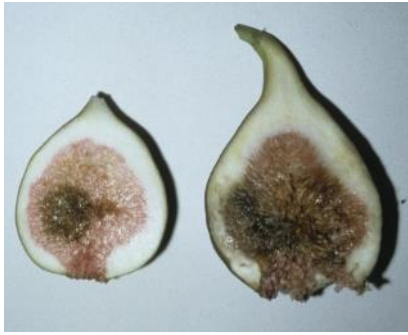
幼虫発生期

ナシマルカイガラムシ: 5月下旬～6月中旬、8月上旬～中旬

ヤノネカイガラムシ: 5月下旬～6月下旬、8月中旬～9月上旬

いちじく

アザミウマ類



被害果

特徴

- ◆ 主にネギアザミウマ、ヒラズハナアザミウマ、ハナアザミウマ等がいちじくを加害する。
- ◆ 果実の横径が2.5～3.0cmの頃から2週間程度の間に入入する。
- ◆ 果実内に入入し食害する。食害された果実は内部が変色する。

防除のポイント

- ◆ 成虫発生期(5月下～6月中旬)にディアナWDG、グレーシア乳剤等を散布する。
- ◆ ほ場の周囲を0.8mm目合いの赤色ネットで覆い、成虫の入入を抑える。
- ◆ 乱反射型光拡散シートをマルチとして設置し、成虫の入入を抑える。

花き

きく

黒斑病、褐斑病



葉の病斑*

特徴

- ◆ 雨滴によって感染が拡大する。
- ◆ 病原菌の生育適温は24～28℃ぐらいである。

防除のポイント

- ◆ 降雨の多い場合に発生が多いので、発生前からダコニール1000等を散布し、予防に努める。
- ◆ 被害葉は取り除き、ほ場外へ持ち出し処分する。
- ◆ 発生を認めたら、ベンレート水和剤、ストロビーフロアブル等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

注)ダコニール1000は、花卉に薬液が付着すると漂白・退色などによる斑点を生じる場合があるので着色期以降の散布はさける。また、かぶれに注意する。
ストロビーフロアブルは高温多湿下では、薬害の恐れがあるので使用しない。また、他剤との混用は薬害が生じる恐れがあるので注意する。

アザミウマ類



ミカンキイロアザミウマ成虫※

特徴

- ◆ 品種により被害の現れ方に差がある。
- ◆ 花卉はミカンキイロアザミウマやヒラズハナアザミウマなどが加害し、葉は主にクロゲハナアザミウマなどが加害する。
- ◆ ミカンキイロアザミウマはウイルス(TSWV※1、CSNV※2)を媒介する。

※1 キクえそ病の病原ウイルス ※2 キク茎えそ病の病原ウイルス

防除のポイント

- ◆ ほ場内および周辺の除草を行う。
- ◆ きくの残さは放置せず、ほ場外へ持ち出し処分する。
- ◆ ビニールなどのマルチングにより、土中での蛹化を防ぐ。
- ◆ 施設では、開口部に0.8mm目合いの防虫ネットを展張し、成虫の侵入を防止する。
- ◆ 葉の被害に注意し、小発生時の防除を徹底する。
- ◆ 発生を認めたら、ディアナSC(花き類・観葉植物(除りんどう))、アファーム乳剤等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

その他 注意すべき病害虫

水稲

スクミリングガイ(ジャンボタニシ)



成貝



卵塊

特徴

- ◆ 成貝の殻高は2～7cm程度になる。
- ◆ 田植え直後から約20日後までの苗が食害され、欠株になる。成長した稲(5葉期以降)は食害されにくい。
- ◆ 卵は濃いピンク色で、稲の茎や葉の付け根、あぜ板、用水路の壁面などに産卵する。
- ◆ 寿命は2～3年で、多くの個体は2年目の産卵期を終えると寿命を迎える。
- ◆ 低温耐性は強くないが、府内では越冬が可能である。

防除のポイント

- ◆ 加害時期(田植え直後から約20日後まで)にスクミノン、スクミンバイト3、ジャンボたにしくん等の散布や、浅水管理により重点的に防除する。
注)スクミノン、ジャンボたにしくんを使用後は7日間たん水状態にし、かけ流しや落水はしない。
- ◆ 加害時期以降は、卵塊を水中にかき落とし(濃いピンク色の卵は水中で窒息死する)、成貝は捕殺して、貝の密度を低くする。
- ◆ 心化直前の白っぽい卵は水中でも心化するため、水中に落とさず除去する。
- ◆ 用水路からの侵入を防ぐため、取水口や排水口に金網(目合い5mm以下)を設置する。

「スクミリングガイ(ジャンボタニシ)生態と防除」(令和7年5月発行)もご参照ください。

<https://www.pref.osaka.lg.jp/documents/91954/r7sukumiringogai-osaka.pdf>

果樹

バラ科果樹(もも、すもも、うめ等のサクラ属)

クビアカツヤカミキリ



フラス



幼虫

成虫

特徴

- ◆ 成虫は体長2～4cm。前胸部は明赤色で、全体は光沢ある黒色。成虫は6～8月頃に羽化する。
- ◆ 幼虫は樹体内を食害し、4月～10月頃にフラス(幼虫の糞・木くず・樹脂の混合物で、中華麺～うどん状の太さに固まる)を排出する。

防除のポイント

- ◆ フラスの発生を見逃さないように、ほ場をよく見回る。
- ◆ フラスが見られたら、千枚通しや針金等でフラスをかき出してからロビンフッド(もも、すもも、うめなど)を注入するか、幼虫を突き刺して殺虫する。
- ◆ ネットを設置した場合は、ネット内での交尾・産卵を防ぐため、定期的にネット内を確認し、成虫を見つけしだいハンマーなどで捕殺する。
- ◆ 成虫の発生を認めたら、モスピラン顆粒水溶剤(もも、すももなど)、アクタラ顆粒水溶剤(もも、うめなど)等を散布する。

「クビアカツヤカミキリの生態と防除対策(R7.3改訂版)」もご参照ください。

https://www.pref.osaka.lg.jp/documents/91954/kubiaka_osaka.pdf